

## 総合討論

司会：応地 利明

応地 総合討論に入る前に、一つだけ田村さんに確認をとりたいと思う。最初に国民国家を東南アジアで考える場合に、その基盤にあるものが生態を含む長期的な歴史なのか、あるいは近代の西洋との接触の中で出てきた所産なのかという問題を出されていたが、その結論は述べられなかったように思う。その立場を明らかにしていただいてから、高谷さんから議論を返してもらおうと思う。

田村 国民国家という概念と、その内実の制度は、あくまでも西洋からもたらされたものであろう。その意味では中期的、短期的なものだと思う。高谷さんの議論のポイントは、外からもたらされたものだけではなく、伝統国家との連続性があるのだとされていた。そこは議論の分かれるところだろう。私は国民国家の概念自体は新しいものだと考えている。

高谷 非常にクリアなコメントをいただいたと思う。早瀬さんはマレー世界を対象として、歴史的な観点からヒンドゥー化、イスラーム化、後背地と港市、動きまわる人間の故郷と都市、そして普遍的な外の世界というものを説明された。そこでは、動きまわる人間も決して浮き草ではなく、故郷と都市という帰る場所を持っているとされていた。私としてはそこをもう少し議論したいと思う。故郷としてイメージされるものは、例えばスマトラの山村であるとか、ジャワの農村のようなものだろうか。都市とは、例えばジャカルタであ

るとか、時にアラブの町のようなものも考えられるのだろうか。そこのところが議論できれば有り難いと思う。

また、国民国家ができて、東南アジアの国々はアメリカやロシアに依存しなければ存在できなかったという指摘もあった。これはその通りで間違いはない。システム論としてはそれでいいのだが、地域研究としてはその方向へはあまり行きたくない。地域統合の問題で、統合のセンターが東南アジアの外にまで出てしまうことも考えられるとも言われたが、これもそうあって欲しくないと考えている。

それから、歴史を考える上での3つのスパンのことを話された。長期的なもの、中期的なもの、短期的なものがあって、現在では短期的なものが非常に強く利いてくるような状況がある。だから、事態を生態で議論するのは無理ではないかという指摘があった。そうかもしれないと思うが、地域研究という立場からは、やっぱり地域性、生態的背景というところから考えたい。少なくともあの近世のイスラーム化の頃の町や田舎のことを頭においてから、地域統合や世界システムという議論を展開していきたい。

田村さんの話で非常に面白いと感じたのは、インドネシアという国だけが国民国家を考えていたということと、もう一つは、外から入ってきた近代コード自体も一つのものではなかったということである。素人の私の知ら

なかったことで、ああそうだったのかと勉強させられた。それから、シャンの王族が、ビルマ語を宮廷言語としていたことも初めて知った。これは非常に私には興味深かった。ひょっとするとイラワジ流域には、ビルマ世界と言えるような世界単位があるのかもしれない。この点はもう少し考えていきたいと思う。

もう一つ、そうだなと思わせられたのは、動いているのは知識人だけではないという指摘だ。百姓も動き、外に連絡があるという指摘であった。私はそのところはもう少しつめる必要があるのではないかと思う。百姓も動いている。しかもその動き方はやはり地域によって差異が出てくる。シャンの農民とマレーの農民では、動く距離や速度、範囲も違ってくるだろう。それを具体的に地図の上を示せるようなことができれば、東南アジアの全体像は非常に理解しやすいものになるのではないかと思わせられた。

これらはいずれも細かいことなのだが、やはりもう一度お願いしたいのは、生態という視野を議論の中に入れて考えてほしいということだ。

早瀬 故郷というのは、アイデンティティを確認できる場として考えている。特定のものという意味ではない。特に移動性のある海洋民に、特定の場所は言えないかもしれない。最近の私の研究の一つは、フィリピンのミンダナオ島とインドネシアのサンギヘ島のサ

ギール族を対象としているが、一つの民族がフィリピンとインドネシアの国境で分断されると、文化的に違った現象が現れている。そこでの人々が持つ歴史的共有を見たとき、村のような特定の場所ではなく、伝説のような共有するアイデンティティが浮かび上がる。アイデンティティの確認できる場とは、仲間意識を確認する場であり、民族を確認する場と言えるだろう。

都市をネットワークで考えれば、東南アジアでは商業的な意味合いが非常に濃くなる。ヒトとモノが集散する場であり、情報が発信できる場所だ。その時代によって必要となる場所も変わるだろう。日本にも昔は各地方に情報の発信場所があったはずだ。しかし、戦後になって東京に一極集中し始めたのは、現代の情報発信基地としての東京が求められたからだろう。東南アジアでも同じように、今では例えば、ジャカルタにみんなが集中し、そこだけが巨大化するような現象が起きている。そういう意味での都市としてとらえている。元々小人口世界の所に人口の集中する場所があり、その周辺の人々に文明や文化を発信する基地でなければならなかった。そういう都市を必要としていたと考えられる。

東京外大A A研の池端雪浦さんが、「フィリピン国民国家の原風景－ホセ・リサールの祖国観と国民観－」（『アジア・アフリカ言語文化研究』46・47, 1994年）という論文を書いている。それは、リサールが「祖国」を発

見したというものだが、その議論の中に忘れられていることがある。実はリサールは故郷カランバの人々を連れてボルネオに移住する計画を立てていた。実際に下見にまで行ったが、フィリピンの宗主国であったスペインに認められず、結局は実現できなかった。おそらくリサールが「祖国」として思い浮かべていたものは、特定の場所ではなく、カランバの人々の顔だったに違いない。にも拘わらず、「祖国」というものを構想したのだ。それは誰にでもあることだろうとも思う。これは生態系が優越するという議論とは結びつかない。「最初に生態ありき」ということでは考えられないだろう。生態系で語れる部分と語れない部分を整理しなければならないというのは、そういう意味での区分が必要だと感じたからだ。決して生態系を考えていないわけではない。

**田村** シャンの農民とマレーの農民の動きの違いを地理的にとっていくという方法論はありうるだろう。しかし私が言いたかったのは、単に人が具体的に動くということだけではなく、外の世界を人の動きだけではとらえられないということだ。外の世界というのは現在だけにあるのではなく、むしろ昔から、さまざまな情報として入っていただろう。それは活字に限らず、よそへ行った人の話を聞くようなものでもあったはずだ。

もう一つ、現代社会における人の動きを見るとき、典型的な例としては軍隊がある。軍

隊に入って動く。地方の部族がビルマ軍に入り、奥地で反政府軍と戦うこともあった。それは生態系ではなく、まさに近代の国民国家がもたらした新しい人の動きだ。そういうことはやはり一つ一つ区別を明確にするべきだろう。また、タイではツーリズムが非常に盛んになってきている。現代の現象ではこのような動きもあることを指摘しておきたい。

シャン人がなぜビルマの方を向いているのか。その説明を歴史的に先述したが、そもそも古い昔になぜビルマへと流れ下っていったのかを考えれば、動きやすかったとしか言いようがない。その意味では生態的な重要性というのは十分認識している。ただ、最初にも言ったように、高谷さんの話は生態というより、哲学ではないかと思っている。高谷さんの言う生態は直感的なものにしか思えないところがある。もう少し直感的ではない生態を提示してほしい。

**坪井善明** 高谷さんをはじめ、東南アジア研究センターの長所は、とにかく現地を歩き、その視点から論理や説明方法を積み上げていくということにある。高谷さんが今までされてきたのはヨーロッパの用法を使わずに、現地を歩いた観点から独自の説明論理を持つとするその営為と努力に私は刺激を受けてきた。

田村さんの議論は共感するところが多いが、インドシナが社会主義だから国民国家ではなかったという話は、少し公式的過ぎはしない

か。例えばベトナムでホーチミンのしたことが、民族主義か、民族解放なのか、あるいは社会主義なのか、まだ十分解明されていない。だが私見では、独立を求める運動、ホーチミンとスカルノの連帯、非同盟の動きを視野に入れると、やはり国民国家を形成するという意志は確かにあったのであって、社会主義という形で国民国家を超えたものを既に求めていたというのは、外からの事後的な理論的な読みすぎないように思う。

東南アジアの国民国家は、植民地という西洋近代の接触の中から出てきたものだ。だが各国ともに、西洋で行われたような国民国家そのままをモデルとして国家形成をしたのではない。というよりも、歴史的な文脈や社会文化環境が異なっていて、ヨーロッパモデルはモデルとして成立しなかったのだと思う。

一方では軍備強化や、博物館のような国民文化の創設など、完全なヨーロッパモデルを目指す動きもあれば、他方では土着風土に基づく形で漏れくるものを組み入れる動きも懸命にしてきた。その営為の結果として、それなりの発展があり、近代国家の構造を徐々に作りあげてきた。さらに今の東南アジアでは、マハティール、リー・クワンユーよりも若い世代の人々が、普遍に至る道は多様で、その形態はさまざまにあるという主張を始めている。これは非常に興味深い。第二次大戦後、政治的独立を求め、独立主権国家、ネーションステートを作ってはいくが、経済的、文化

的には宗主国の影響を長い間払拭できずにいた東南アジアの国々が、ようやく政治的にも経済的にも一人前になってきた。一人前の国として国際社会の中で認知されたいという運動は、東南アジアの観点からすれば、言うならばルネッサンス、つまり一つの間人間の回復運動だった。が、それはすべてヨーロッパのナショナリズムという概念で説明されてきたのだろう。しかし今、「普遍に至る道は多様なのだ」と身をもって示している。福沢諭吉が100年以上前に言った観念的な「文明の始造」が初めて現実になされつつある。そこで新たに、東南アジアの風土に基づいた生態をかみ合わせ、ヨーロッパモデルとは違うものを作ろうとしている段階が今ののだろう。そういう国民国家をとらえようとするとき、長期的、中期的、短期的展望という三つが、いずれの国でも生態の条件と絡みながら平行して起きている現象を、高谷さんは生態の立場から場に沿った形の論理を使って説明しようとされたのだと思う。早瀬さん、田村さんは社会科学的な概念を使いながらとらえようとしているのだろう。

田村さんが言うように、ヨーロッパの歴史や近代は国ごとにさまざまである。その宗主国によって東南アジア各国の受けとめ方も違ってくる。中でもイギリスは帝国主義という形で最初に外に出てきており、無自覚なところがある。フランスやドイツ、アメリカ、オランダは後発であり、イギリスとは時間的

な差がある。そこを横並べにして比較することはできないのではないか。

**藪野祐三** 戦後、アジア、アフリカ、ラテンアメリカは、発展途上国として一括りにされてきた。アフリカは未だに農耕型社会で、国民経済というリアリティがどうしても浮かばない。ところがラテンアメリカはヨーロッパ人が流入し、黒人も入れていない。ヨーロッパそのもののような様相があり、1930年代のアルゼンチンではアメリカを超える一人当たりのGNPがあった。それを第三世界に入れるような安易な研究がされてきた。そう見ると、東南アジアは宗教的にも多元性があり、歴史的にも古い。地域研究における特殊性、あるいは他の比較における東南アジアの位置付けを聞いておきたいと思う。

政治学では国民国家の終焉という話題も出ている時代に、東南アジアでは国民国家が議論される。ヨーロッパでは国民国家を超えてEUになり、北アメリカは北米自由経済圏を目指し、国家連合をやろうという時代に、とりわけ東南アジアは国民国家の問題に将来の展望と近未来の可能性を持っている。それがなぜなのかという疑問がある。歴史的に言えば国家というのは器であり、主権と人民と領土があれば成立する。国家はギリシャにもあったし、ローマ帝国にもあった。その中身に「国民」という概念が入ってきたのは極めて近世である。長い歴史を持つ国家さえ問われて、同時にその中のネーション、ナショナ

ル、国民という単位も問われている。その意味では、国民国家の器としての国家も問われ、国民も問われているのが現代である。

国民国家とは、国家という器に国民が入ってできた極めて近代的な産物である。それは「国民国家」とワンセットで議論されるが、そのカウンターパートは「国民経済」である。国民国家と国民経済はワンセットであり、経済圏として国家を作り、経済を作るセットが国民である。フルセットの加工をするためには5千万人の人口規模が必要である。国民国家形態の原型を成したヨーロッパの国々ではそうだった。しかし、東南アジアの場合には全く違う。人口の規模が違うし、フルセットではない。例えば第一次産業、第二次産業、第三次産業という産業発展も、東南アジアでは第一次産業が圧倒的に多く、次に多いのが第三次産業である。これを含めて、東南アジアの歴史的特異性をもう一度掘り起こすべきではないか。

学問は遅れた後発地が理論化し、イデオロギー化する。国民国家概念はイデオロギーであり、実態はどこにもないのだろう。ましてや国民が国家を作ったところなどないのだ。どこの国を見ても何かは抜け落ちている。イデオロギーで言えば、人権、民主主義、平和、環境などのイデオロギーはもう一度東南アジアで問い直していく必要があり、国民国家だけが生態系を考えるキーワードではないと思う。

ただ、遅れた社会科学は抽象化の傾向が強くなる。アダム・スミスの「国富論」はスコットランドから見たロンドンを抽象化したものだ。また、ドイツという後進の国が先進のイギリスを見て抽象化したのが、マルクスの「資本論」である。ましてやウェーバーの個人主義理解は、ドイツに近代化をもたらしたいという意図があり、純粋な個人主義論になっている。日本人がドイツの文化を受け入れやすかったのも、辺境からの理論的思考を必要としていたからだろう。大学のカリキュラムを見ても、現在後進と思われる国では原論指向が強い。政治学原論という講義は、東南アジアの国々や日本にはあるが、アメリカやイギリスにはない。出遅れてしまった国では、どこかにピュアなものを含めたイデオロギーが強化され、それがドライブとなって一つの形式を作っていく。しかしそれ自身は歴史までをも否定することはできないのだろう。

いずれにしろ、国民国家終焉と言われる時代に、東南アジアで国民国家にこだわるのはなぜか。それは第三世界の特殊性という中で積み重ねた議論をするべきだ。また民主主義は生態系からみてどうなのか。国民国家を論じるならば、民主主義、国民経済や人権等はセットとして、総合的に論じなければならないが、なぜ国民国家だけを問題にされるのか。それを生態系でとらえて、東南アジアの構想力とされるのは、一体どのような意味があるのだろうか。

玉田 私も政治学を専門としているが、取り立てて東南アジアで国民国家を論じる必要はないと思っている。国民国家の終焉という考え方も有力になっているが、少なくとも100年、200年の間はなくなり、支配的なイデオロギーとしてとどまるだろう。それは東南アジアもヨーロッパも含めての話である。ヨーロッパの統合の根底にあるのは、ナショナルな利益を考えてのことで、人類普遍の論理で統合するのではない。ヨーロッパでの統合は、各ネーションの相対的な地位が世界の中で低下するのを統合で防ごうという、ナショナルな利益関心に起因しているのだろう。

「国民国家」を議論する際には、「国民」と「国家」は別物であるという大前提を忘れてはならない。高谷さんの話の問題点は、その二つが明確に区別されていないところにある。「国家」というのは確かに大昔から存在すると言えるが、「国民国家」を論じる場合には、あくまでも近代国家に限定される。その意味では、19世紀後半の植民地支配の確立は、近代国家の枠組みを完成するものだったといえるだろう。植民地では「国民(ネーション)」というのはその後に出てくる。独立するためには「国民」というのは欠かせない。民族自決はネーションの存在を前提としており、それがあって初めて独立できる。嘘でもそれがあると言わねばならない。なければ作らなければならない。そこにアンダーソンの言う「想像」という作業も出てくるのだろう。

さらに独立後ではまた事態が変化する。理論上はネーションと国家が合わさり「国民国家」が成立したことになるが、実態として「ネーション」を持つ国は少ない。多くは「ステート」に重きを置き、ネーション・ビルディングは、国家の忠誠心を植え付けることに終始する。コナーも、途上国の場合、政治学で言うネーション・ビルディングはネーションの破壊であるとしている。それはネーションよりもステートを上に置くという意味である。高谷さんが指摘されたインドネシアの息苦しさは、違う生態系を一括りにしようという動きからではなく、むしろネーションの上にステートを幾重にも重ねていく動きから生まれているのではないか。国民国家から考えるならば、それが正しい解釈だろう。仮にジャワが一つの国民国家であり、海域世界が一つの国民国家であれば、息苦しい思いをしなくて済んだのかという逆説も考えてもらいたい。

**早瀬** 国民国家の終焉と言われる中で、なぜ東南アジアで国民国家が議論されるのかという点で、意見を述べたい。フィリピンは国民国家への努力をあまりしていないと言ったが、それでも着々と国民国家は成立してきている。その一つには、ボーダレスからの影響がある。ボーダレス＝国境の消滅のように言われるが、現実には国境はより意識され、明確になる場合もある。例えばフィリピンにおけるマレーシア、インドネシアとの国境、さらに東南ア

ジア全般でも、国境というのは現在の国民国家の間で取り決められたものではない。最近まで、平気で国境を越えた人々の移動や交易がなされていた。ところが政府公認の国境貿易が始まれば、従来の交易は密貿易という違法のものになる。そういう意識下の国境が引かれつつある。

もう一つには国籍の問題がある。フィリピンのように出稼ぎが国家財政を支えているような国では、パスポートの取得という行為から、民衆のレベルでフィリピン人の自覚が新たに生まれてくる。あるいはアメリカの影響力が弱まり、自立を余儀なくされている状況から、さまざまな課税が行われるようになった。国民は税金を納めるべきだということからも「国民国家」という意識が生まれている。さらに10年前の二月政変のときに、ラジオがタガログ語でニュースを全国に伝えた。以前にはほとんどタガログ語の通じなかったミンダナオ島でも、今ではかなり普及している。このようなことが国民国家を形成する要素となっているが、いずれも生態とはあまり関係のない現象ではないか。

**藪野** 国民国家の終焉というのは極端な議論で、実際には無くなることはないだろうが、非常に弱体化するだろうという話だ。「ネーション」というのは、歴史的に見ても強権的に作られており、一般に思われるような自然発生的なものや予定調和的なものではない。また、経済史の立場から見ても、局地経済圏

のネットワークが文化的生態圏にドライブをかけて「ネーション」が成立したとされる。例えばイギリスではマンチェスター、オランダではロッテルダムやアムステルダムが例として挙げられるだろう。もちろん、「ネーション」の成立には生態系の関与もあり、両方の要素が絡んでいることは自明だが、高谷さんの議論は国民国家の「国民」にウエイトが置かれ、「国家」の概念が希薄ではないか。民族の解放やアイデンティティの問題を議論するときに、ヨーロッパの国民国家そのものが自然発生的だったという前提があるように思う。しかし、実態は政治的文脈の中で作り上げられてきたものだと考えてほしい。

**立本成文** 国民国家論が議論の中心になってきたが、「東南アジアの構想力」についても議論してもらいたい。「構想力」という曖昧な言葉は、絵を描くときのように、プランを立て秩序を考えていく力という一般的な意味で考えたい。その場合に問題になるのは、その主体が東南アジア自身なのか、研究者であるのかということだ。あるいは東南アジアから得られる構想力なのか、東南アジアが持っている秩序の構想力なのか。私はその両方を混然として含め、東南アジアにもそういう構想力があると主張したい。東南アジアが主体となり秩序の構想をする場合、高谷さんは生態的基盤が考えられるのだと主張されたいのだろう。その主張を具体的に議論するために、生態的基盤の上に国民国家が生態調和的に

乗っているということ为例として取り上げられたと思う。しかし、今日の話では、生態のロジックがわかりにくく、理解しにくい点があったので、それを質問の形で出したいと思う。

第一点は、ジャワと海域世界との共存処理の不便と言われたが、エコロジーの違うものを共存させる処理は、どうすれば手際がいいのか。あるいは全然別々にしておくべきなのか。例えば、中国でエコロジーの異なる単位が一つにまとまっているのは、儒教という天蓋が覆っているからだと言われる。そうすると、東南アジアの場合はそういう天蓋がないだけの話なのか。共存処理のロジックを生態論理はどう考えるのかという、積極的な見通しがほしい。そして第二点は、生態を基盤とする東南アジアの「王の尖端放電」の図に、「国民国家」はどこに入り、どういう形になるのだろうか。第三点は、東南アジアの構想力で、尖端放電というのが新しいフォーメーションとして、次の秩序に発信するのであれば、どんな形になるのか。哲学ではなくて、生態論理的な説明があれば、国民国家と生態的基盤とを結びつけた議論ができるのではないか。

**高谷** 皆さんが言われたことには、みんな賛成できる。今の立本さんの質問に対する答えだが、私は国民国家が唯一のあるべき姿である必要はないという大前提をおいている。国民国家の代わりに生態的バランス、あるいは

生態ロジックに生きるというイデオロギーが出てきてもいいと考えている。21世紀中には出てくるだろうイデオロギーを東南アジアが先取りするのだ。だから、私の話のポイントは国民国家としてうまくやっていくためにはどうするのかという話ではない。もっと別の次元のことも考えている。海域世界のようなシチュエーションなアイデンティティを持った所と、ジャワのような求心的なしっかりした社会が共存していく方法論が必要であるが、それをどう考えたらよいかということである。この問題はとりわけ東南アジアが考えれば面白いのではないかという話である。政治学者達があまりに国民国家一点張りで議論をするものだから、私も国民国家を一応は取り上げてはみるが、もう少し違った局面、例えば、生態ロジックで考えてみようではないかということだ。

リー・クエンユやマハティールのような人達の考え方も、ひょっとしたらそういうものに通じていくのではないか。東南アジアでは決して国民国家が最終的なイデオロギーではなく、新たなイデオロギーが出てくる可能性がある。だが世界中がそうなるとは思わない。ヨーロッパでは、やはり国民国家的な発想が強くなるだろう。世界が全部一つのイデオロギーに治まるとは考えていない。ただ東南アジアのイデオロギーは生態論理で考えたらどうかということである。

**立本** だが、東南アジアでは国民国家が生態

同調的であると言われていた。

**高谷** そうは言っていない。発展論者の目には同調的に見えると言っていたのだ。

玉田さんに国民国家と単なる国家との混同があると言われたが、その通りだ。政治学者でない素人が馬脚を現している次第である。ただネーションというのは、強権的に作らなくても、例えばジャワのような所ではあったのだろう。だが、今の国家というものは強権的に作られてきた。政治バランスの上で国境が引かれたが、それは間違った引き方であったのではないか。ここで私が言いたいのは、国民国家としてのより良い改良した国境線を考えるよりも、東南アジアが独特の構想力で全く新しいイデオロギーを出して、一挙に何かシステムを作れないかということである。

私はもう東南アジアにおいては国民国家というのは考えていない。尖端放電の図の中に国民国家を入れようとも思わない。国民国家があらねばならないという前提で話をされると困る。このところは何とかもう少しシチュエーションにいかないものだろうか。ヨーロッパの人達が自分達の局地経済圏を発展させて国家にしたものとは違った筋道がないのだろうか。例えば、偉い王様や高い山が、何か強いパワーを出して、それをもって社会がまとまっていく。そうしたシステムが掘り起こせないかと思うのだ。この伝統は実際にあるのである。これは極めて脆いものだが、世界秩序を考えたとき、頑張っても残した方

がいいのではないかと思うのである。

この「東南アジアの構想力」という題を与えられたとき、国民国家なんて考えないで、東南アジアが何かいいものと考えたとしたら、何が出てくるのかを奔放に考えてみた。それが今日の話の実際のところだ。たまたま土屋さんが亡くなり、彼のことを想い出して、それと絡んで国民国家を語ったのだが、実は国民国家そのもののことはあまりつめては考えていない。

**藪野** 「国民国家を超えるもの」という話ならばよくわかる。国民国家というと、どうしても権力概念になる。私は団塊の世代で、学生の頃、吉本隆明の「共同幻想論」がよく議論の対象になっていた。社会そのものは権力と不可分であり、権力論を書かない「共同幻想論」はフィクションだという批判の一方に、社会そのものの到達は非権力社会であり、「共同幻想論」がいいのだという議論があった。それを高谷さんの議論に返して言えば、東南アジアには国民国家は必要ない。国民国家を超えたところに、何か躍動するものがある。それが尖端放電やシチュエーション・アイデンティティじゃないか。これには何の反論もない。

ハンチントンの「ザ・クラッシュ・オブ・シベライゼーション」という有名な論文がある。イスラームでも、国家は要らないと言う。それはイスラーム文明という形で、一周遅れのファーストランナーになっているのではな

いか。近代化が言われていながらも、逆に歴史はまわっていて、イスラーム社会は一周遅れのファーストランナーになる可能性がある。ただ、東南アジアではトップが見えているために、成長のトライアングルや局地経済圏ができてきて、国家が作れるという幻想もある。イスラーム世界なら一周遅れのファーストランナーになれても、東南アジアは半周遅れなのだ。それを一周遅れとするのか、もう一度トップに行けと言うのか。そこを議論する必要があるだろう。

**高谷** 私の言いたいことを端的に言い表してもらった。東南アジアは確かに、経済で一発逆転して、次の半周でナンバーワンになりたいと思っているのだろう。それも全く事実だと思う。だが、違う考えがあると言うのも地域研究なのだとも思う。

**関本照夫** 私の高谷理論理解を、今、高谷さんご自身に否定されてしまった。私が受けとめた正しい高谷理論を言わなければならないだろう。その前に一つだけ伺いたい。色々あっていいと言い出すと、ではなぜ東南アジアなのかということになる。東南アジアでなくてもいい。色々な地域があって、色々な人がいてそれでいい。そこまで言われるのなら賛成できる。

**高谷** その通りだと思う。

**関本** そうすると、東南アジアの構想力も無いことにならないか。藪野さんは半周遅れと言われたが、私の理解では、東南アジアは近

代化の優等生だ。それもやや皮肉な意味での優等生で、先行モデルを一生懸命真似している。その限りはトップランナーにはなれない。確かにアンダーソンの議論は、最初に帝國的秩序や宗教共同体の秩序を考えている。元々人間はそういう秩序の中で安心して生きていたが、それが崩れてしまったところで考えたのがネーションだ。その意味では、非常に人工的であり歴史的であり、歴史的な偶然から生まれてきたというのが、アンダーソンの議論の前提だと思う。ヨーロッパにおける近代モデルの偶然性・人工性に対して、東南アジアは国民国家という衣装を着てはいるが、着るべき「くに」がそれ以前からあったのだという議論だと思った。それならば東南アジアが単なる西洋を真似した優等生だと言わなくていい。西洋的なものも自分の身の丈に合わせさせている。そういう私の高谷さん理解はどうも違っていたようだ。

高谷 その見解は、私も持っている。

坪内 私も関本さんと同感で、高谷さんにはぐらかされた気がする。高谷さんも最初は、東南アジアの国民国家が、ちゃんと生態基盤を持って作られているという考えだったはずだ。ジャワ、インドネシアを扱うときに、二つに割ってうまくいっていないという議論が、土屋さんに引っ張られて無くなってしまい、途中で別の方に向いたのではないか。政治学では素人の高谷さんに、国民国家という言葉の扱い方の誤解があるとしても、最初は国家

論に近いところで何かまとまりを見つけないつもりだったと思う。まとまりを見つけようし、どこかに結論を落ちつかせようとする中で、混乱があるのではないか。

高谷 少し誤解があるようだ。私はいつもは対話のなかなか成立しない政治学者と対話をしてもらうためにそう言ったのだ。東南アジアの国民国家はうまく広まってますよと言っていたのだ。だがそれはカッコ付きの「うまく」で、いわばオトリ発言である。そこで言っていたことの真意は国民経済はうまくいっていると言っていたのだ。それに今日の研究会でも最初はそのことだけを議論しようと考えていた。しかし、その後、土屋さんやアンダーソンの本を読んでいると、これはいけないという気になってきた。国家は論じてはいるが、国民の本当のところ論じられていない。これなら少し本格的に論じなければならぬと思って予告編とは少し違ったニュアンスになったわけだ。

こんなわけで、今回の話は色々に入れ混ぜてしまったが、最終的には国民国家よりも、生態論理みたいな話になった次第である。私の路線変更で皆さんに混乱を与えていると思う。

坪内 だとすると、高谷さんの言う国民経済という単位で言えば、東南アジアでは経済の単位がうまく作られているのだという考えは変わらないのか。

高谷 それも正確に言うと答えはやや複雑で

ある。基本的にはそれでよい。しかし、こういうことも考えておく必要がある。20世紀の後半から、人類史は大きく熱帯多雨林の時代に入ってしまった。人類史的に言うと、砂漠の時代から混交林の時代に入って、最近一挙に熱帯多雨林の時代に入った。そこで、東南アジアでは木を切っていくことで非常に儲かるようになった。こうなると経済的好況というのは本当に国家がうまくやったのかはもう一度議論をする必要がある。そういう地球的状况があるのだが、正確にはその中で東南アジアの国民経済はうまくいっている。

応地 話の変化が急でわかりにくい。木を切って儲かると言っても、経済活動全体をとって、人類史的な意味の経済発展を考えれば大したことはない。

高谷 木を切ったということだけではなく、その結果、人口も急増し、熱帯多雨林自体が変わったということだ。全体状況としては、地球そのものが新たなステージになっているのではないかと考えている。この点に関しては他の生態学者の意見も出してもらえれば有り難い。

古川久雄 熱帯雨林は今まではムラユーやバタック、ダヤックがポツポツと住んでいるだけだったが、今はバンジャール人、ジャワ人、ブギス人が沢山入り込んで開拓し、華人がフローの中樞に座っている。そして、雨林そのものは急速に消えていっている。しかし、明日の飯のことは林に聞け、魚に聞けというグ

ラスルートの生活感覚は全く健全に生きている。この楽観主義の基盤はゴトンロヨンということでグループの安定を個人の自由より重視する伝統だ。林ともゴトンロヨンだよという理屈はグラスルートにはすっと入る。新しいグループも増えて、雨林の扱いに何かアイデアができてそうに思う。国民国家とかは全然分からないが、今までの議論で気になるのは、支配者側の話はあっても、支配される側が抜けているのではないか。例えば山の上で尖端放電している光も、電線が下から上につながった絵を描いた方がいい。下に大勢の人々がいるが、林の中や河口部、火山の裾野などに分散しており、自然が圧倒的に強く人工空間が弱い。そういう中でバラバラになりがちな状況を束ねてくれるのが必要なのだろう。その期待の場所を占めるのが尖端放電だという形で考えないと、尖端放電だけではエネルギーが続かない。

中国の場合も、儒教なんて後の方で行政の中に組み込まれる形で出てきたが、中国の統一システムそのものは、春秋戦国の史記の世界からあったはずだ。やはり上から統合する力と、それを受けとめる住民との関係がバランスをとっていたのだろう。賢い住民がたくさんいる所では、権力が無茶をしても大丈夫なのだろうという感じがある。

ヨーロッパもついでに言えば、キリスト教という天幕が平和に被っているように描いてあるが、現実はそのに武力的な威圧感が絡ん

でいる。ともすれば、自分勝手にいく連中を十字架に付けた槍でぐっと統合している形があるのではと思う。近代に入ってから利益集団の露骨を隠すために、勤勉さだよとか、知性だよとか言って飾り立てた国民国家をダミーに据えている。

若月利之 僕は昔から高谷ファンだが、「世界単位」の頃からは観念の世界に入ったようで、昔の方が好きだった。私自身の興味は、サブ・サハラのアフリカが中心で、この地域は農業あるいは環境など、さまざまな難しい問題を抱えているのだが、何とか現在の東南アジアの活気をあそこに持っていける手段はないものかというのが、一番のテーマになっている。東南アジアとサブ・サハラとの明確な違いは国境のあり方だと思う。東南アジアでも一部には人為的な境界はあるものの、全体としては、川・山・海という自然地理で規定されている。地形自身にメリハリがあり、国境がわかりやすい。土壌も活性があって、非常に肥沃度が高い。非常に恵まれていると言っている。

ところがサブ・サハラのアフリカでは広大で単調な平原が続き、緯度経度しか国境の引きようがないように見える。実はそこには各民族固有の生態環境や文化の範囲が国境のように存在していたのだが、高低差のない単調で広大な平原では非常にわかりにくい。それが欧米列強による勝手な線引きの原因の一つになったと思われる。結局、民族は分断され、

あるいは多民族の無理やりの統合により、分かれたもの同士のあるいは、同じ国境線の中に入れられた異民族間の足の引っ張り合いという現象が起きてしまう。

ある意味では国境線は何でもいい。まとまった単位の人が、生態環境と文化のあるまとまった枠組の中で、どこか一緒になればそれでいい。アフリカの場合はむしろ、ヨーロッパの作ったマイナス要因が強く表れている。東南アジアの場合は人為的に分けられたとしても、地理的な境界に沿っていたことは幸運だったと言えるだろう。生態環境と文化的境界にずれが少なかったように思う。

池本幸生 ボーダレス化の話があったが、タイ、ラオス、ミャンマー、中国の雲南省、ベトナム、カンボジアという6カ国で、経済六角形という地域協力がある。元々はゴールドトライアングルで、タイ、ラオス、ミャンマーの国境付近で麻薬が作られていたという非常にいかがわしい地域があった。それがラオス、ミャンマーが開放政策に転じるという状況になり、この地域を経済的に開発しようということで、中国も含めて四角経済と呼ばれていた。それが今や六角の経済地域になっている。このような経済の地域協力の形は他にもあって、南タイとマレーシアと北スマトラの三つの地域が経済の三角地帯と呼ばれている。五角形というのもあって、インド、スリランカ、バングラデシュ、ミャンマー、タイの五カ国が経済協力の一つの地域として

構想されている。五角形の話は現実味は薄いとは思いますが、そういう計画が色々なところに出てきて、局所的な形で協力が進んでおり、実際にモノも動いている。

残念ながら、この前昆明(中国雲南省)に行ったときには、まだタイの影響力は弱くて、米が昆明市内で売られている程度のもだったが、タイ側の国境地域の経済は非常に活発に動いている。タイを中心とする地域でもボーダレス化が起こっていて、国民国家という方向には向いていないように思った。

原洋之介 去年の12月に高谷さんが東京で研究報告をされたとき、東南アジアでは国民国家はうまくいっているという話をされていた。ちゃんと議事録にも載っている。それが今やひっくり返されたので、多少困惑しているが、それとは別の角度から聞いておきたいことがある。

近代の色々な議論の中で、国民国家は非常に新しい時期に成立したものだ。私は1944年生まれだが、東南アジアに私よりも年寄りの国民国家はない。東南アジアの経済社会を見ていると、それは生態というものに規定されている。歩き回る人とじっとしている人がいて、そういう構造は今も変わっていない。少なくともその経済の動きを見ると、確かに技術は変わるし、物流の量は圧倒的に変わってくるが、仕組み自体はあまり変わっていない。こういう話をされたのだと理解してもいいのだろうか。

国民経済と国民国家という関わりで、現在の東南アジアが直面している問題は、池本さんが言われたこととは逆の方向ではないかと思う。ボーダレスになっているが、そのボーダーはせいぜい1世紀ぐらいのものだ。ボーダレスになったのではなく、元に戻っただけだと思う。その中で国民国家、国民経済を作ろうとする意識が強まってきたのだろう。放っておけば国民国家、国民経済はなくなってしまう。多くの東南アジアの国は1980年代以降、構造調整などで全部自由化してしまった。金融・貿易の自由化によって、カネ・モノの取引に国境は関係がなくなってくる。そこでもう一度国民経済を作ろうという動きが出始めていると考えるべきであろう。自由化だけでは永遠に取り残される貧困層が必ず出てくる。また、自由化で安い賃金だけに依存した工業化ではある程度以上の発展は望めない。そこで教育水準を上げ、多くの技術者を育ててハイテク産業を育てたい。そんな国が増えてきている。国民経済というのは、今から作られるものではないか。

そのときに、ジャワと外島という違う生態区に住んでいる人が、一つの国民国家、国民経済の中にまとまれるかどうか。これには税金の問題が絡んでくるだろう。どの生態区から徴収するのか。またそれはどのような形で使われ、その住民に還元されるのか。経済的な意味で、21世紀に東南アジアが国民国家という枠組みを安定して維持できるかどうか

は、税金の取り方と使い方にかかっているように思う。21世紀のアジア太平洋地域の中では、東南アジアは、経済の方はボーダレスになりながら、国民経済を作ろうという動きがきちんと続く地帯になるのではないかという予測をしている。EAECに関するマハティール構想はそういう意味から、大層重要なものと見るべきであろう。そんなに国民国家に絶望を感じなくてもいいだろう。

高谷 私は東京で、東南アジアは国民国家が一番上手にできていると言ったかもしれない。私の中でも議論は日進月歩しているのだ。そこは帳消しにしてほしい。むしろ国民国家はこれからできていくのだというプロの議論を聞くと、そんなものなのかと思う。それと並行して、熱帯多雨林の時代が始まっている。熱帯多雨林が切り開かれ、人間が増える。そして国民国家が整備されていく。少なくとも、エリート達はそのことを考えて用意しているというお話だ。そういう議論を前提にして、それでは、将来にどういう東南アジア像を考えたらいいのか。これはもう一度、生態学者に助けを借りたい。A01班では、まさにそういうことを考えた議論がされていると思うからだ。

森林伐採も世界システムから起こっている現象である。これを止められないとなれば、一気呵成にその方向に行ってしまうだろう。これはこれで一つの未来像が出てくる。仮にそのところで地域の論理が強くなって、地

域が独立的に物事を処理できるようになったと仮定する。そして、エリート達が税金の徴収と配分を上手に考えたとする。そうなったとしてそれでうまくいくのかどうか。

古川 島嶼部の多雨林は保護林に少し残るだけで、ほとんど消失するだろう。インドネシアの外島もジャワのように全島人工林におきかえられると思う。タイ、フィリピンは既にその状態だ。林の代わりに人間が増える。そうなったときに、かつての西洋のように個人主義とか民主主義とか国民国家で角つき合うようになるとは思わない。

生物でも何でも帰属意識というものがある。人間の帰属意識も二百万年の経過で成立してきたもので、無数のノミ痕が残った。言語とか伝承、身のこなし、食事、土地の景観とか空間感覚、さまざまなものに根を張っていて、簡単には変わらない。東南アジアは自然とグループで対話する生活感覚が根底にある。ジャワのクジャエン思想など実に強固なものであろう。

ただ、問題は銀行や悪い学者を通して近代思想が流れ込む。人間個人の勇猛さや才能を引き換えに完全な私権を手に入れるという考えだ。ゴトンロヨンと完全私権の綱引きになる。結局のところ、欧米人の空威張り、日本人のバブルが反面教師になって、ゴトンロヨンが勝つだろう。

応地 国民国家の話はともかく、高谷さんは生態の重要性は主張し続けている。一方では、

生態で説明できるものとできないものがあるという指摘がされてきた。現在のトランスナショナルな統合のときにも、生態は全く効かない。生態で説明できることとできないことを限定させながら、その中で東南アジアの世界をどうとらえるか、生態の方に重きを置きながら議論してみたいと思う。

**早瀬** 私の研究対象地域の一つであるフィリピンのダバオは、おそらく最初に熱帯雨林が無くなった所だ。それは戦前から始まっており、東京都と同じぐらいの面積の熱帯雨林を日本人が切り倒して、アバカ(マニラ麻)を植えた。木材の伐採も戦後になるとさらに進んで、最近バナナなどが植えられている。熱帯雨林が無くなると、気候すら変わってしまった。戦前の記録では定期的にスコールがあったが、今ではそんな現象は見られない。生態系自体が完全に変わってしまったと考えていい。

そこでできあがったのはフロンティア社会で、戦前においては日本人が支配し、マニラの意向が通用しない世界だった。戦後はキリスト教徒のエリート達が入り、森林伐採のコンセッションをとって、彼ら主導で開発した。そこにはマレー海域世界の特性はなくなってきている。人口増加によって、マレー世界の特性よりフロンティア世界の特性が現れる地域が多くなってきていると言えないか。そういったものを含めて、生態中心に国民国家を語ろうとするのは無理があるということと言

いたかった。

**高谷** 原さんの議論にもう一度戻らせてほしい。この議論にひっかけて重要なことを言いたいからだ。現在の東南アジアの状況を整理すると、それは三段構えになっている。一つは世界システムという層が伸びてきている。それから、マハティールとかリー・クワンユーとかいうローカル・エリートの層がある。この層の実体は少し複雑だ。この二人だと基本的にマレーの型だが、ジャワのスハルトになるとまた違う。二人とは違う論理を持っている。その下に民衆の層がある。三段構えになっている。世界システムでは、間違いなく森は切り開くか、いわゆる持続的開発という形で攻め入ってくる。ところがローカル・エリートは少し違う可能性がある。それを海域のローカル・エリートがどう考えているかということ、ジャワ世界のエリートがどう考えているのかということは分けて考えた方がいい。それは後で考えるとして、問題は住民達はどう考えているのかということだ。ここのところが大変重要なので、少し説明させてほしい。

研究者の中には、現地の民衆は森などいらないと言っていると言う人がいる。質問したら、そういう答えが返ってきたというのである。だが、ここのところはよほど考えてもらわないといけない。私は田舎に住む百姓の一員として発言をしたいのである。

例えば、日本の百姓に「水田農業を続けた方がいいと思いますか」という質問表を出し

たとする。すると「やめたい」という答えが返ってくる。それではそれが本当の答えかという、これはわからない。「やめたいけど、やっていく」というような微妙なところまでは回答者は発言してくれないのである。

こういう便利な世の中だからやめた方がいいという考えは半分はあるのである。だが半分は違う。嫌々でもやっていくのが一番いいのだという考え方がどこかに根強くあるのである。それはうまく説明できないけれども、自分も自然の一部だから、こうして今までどおり自然に生きていくのが一番安全なのだという考えがあってのことなのだろう。

多雨林の中にいる人も、そういうものだとってはほしい。彼らは質問表に答えたものなどとは全く違った、もっと複雑な答えを持っているのである。森を将来どうするかというようなことも、外部の人が議論していてもダメなのだ。判りっこない。文化の当事者性というのは極めて重いものがある。東南アジアの構想力というものなども本当はこのところを考えて議論すべきだと思う。

**藪野** 逆に言えば、歴史的にはどこでもそうだった。例えばイギリスの近代化も、シェフィールドという炭坑にロンドンの資本家 came。当時のグローバルシステムであるロンドンがスコットランドに巨大な資本を持ち込み、炭坑を掘ったのだ。今はグローバル化しているから、外国人が来るが、当時はやはりスコットランドとイングランドは違う。近代

化のときに、金儲けになるぞと言って囲い込みをする。だが囲い込みをされた方は食べていけないから、ロンドンに出て行こうとする。イギリスの近代化自身も、結果が出ているから何の問題もなかったように思うだけだ。

ヨーロッパの近代化がエコロジーを排除していたわけではない。エコロジー問題に悩みながら、蒸気機関車を地下鉄に入れたりしている。現在から見れば過去は何の問題もなく一線のように思うが、もし我々がタイムトンネルで17、18世紀のイギリスに戻ったら、同じことを思うだろう。ヨーロッパだけがそれに自由であって、アジアだけがそれに不自由であるということは絶対でない。高谷さんの言われているものは東南アジアの構想力ではなく、近代化の構想力だ。東南アジアの人間だけがそれに苦しんでいるのではなく、18世紀のヨーロッパ人は全部それに苦しんだはずだ。**高谷** おっしゃる通りだと思う。だが、地球全体がパラダイムシフトなどと言って動いている。ところでこの次にはたぶんエコロジーが重要になるのだろう。イギリスではもうとくにエコロジーは死んでしまった。東南アジアではまだそれが残っている。猛烈なスピードで潰されてはいるが、幸いなことに生のエコロジーはまだ残っている。

私は、いま田舎でまだ米を作っている。稲作はまだ生きているし、私は稲作とともに生きている。稲作など嫌だなと思いつつも、泥にまみれてやっている。そういう者が感ず

る稲作の意味と町の人が考える稲作の意味とは違うのだ。東南アジアの人は今はまだ、エコロジーの中で生きている。そういう現状なのだ。当事者しか判らない、そしてその当事者自身うまく表現できない本当のものがあるということを知ってほしいということだ。そういう現状なのだ。そこをきちんと見ようではないかというのが私の主張である。構想力もそこから出てくるものと考えてもらいたい。

早瀬 熱帯雨林の中に住んでいる人間はどうかという話だが、ダバオのバゴボ族は日本人が来る前の19世紀頃までは、森林の物産を集めて、イスラーム教徒に売り、イスラーム教徒が世界市場に持っていくパターンだった。まさに小人口世界に特徴的な現象で、東京都ぐらいの面積に、1900年の段階で1万人ぐらいのバゴボ族が住んでいた。そのバゴボ族が、日本人が熱帯雨林を切り倒した後では二つのグループに分かれていった。一つのグループはさらに奥地に行き、焼き畑を続けた。もう一つのグループは、日本人の農園で働くのだが、常雇いの労働者にはならなかった。気が向けば日本人の農園に行って働き小銭を稼ぐ。これが小人口世界がどうなったかという結論だと思う。

高谷さんが言う生態系での議論が小人口世界を前提とするならば、人口が急増している現状で、生態系はどこまで考えられるのか。そこで考えを分けるポイントがあると思う。人口、あるいは人口密度との関係で、生態系

に支配される社会と支配されない社会があるのだらうと思う。そのことを坪内さんに聞いておきたい。

坪内 これこそ高谷さんがお答えすべき問題だと思うが、その答えは二つあり、どちらにも行けるし、どちらが正しいかもわからない。それこそが今後の問題になるだろう。一つは生態が現存する限りにおいて、人の心を決めているという考え方だ。実際にジャングルに囲まれている限りにおいて、そこでの行動様式が決定されている。それがなくなれば、同時にそれも無くなるであろうという考え方に立つことができる。おそらく高谷さんの話には、こういう考えに基づいていたのだろう。

もう一つの考えはそれに留保を付けて、生態が無くなっても、同じような心の持ち方もできるかもしれない。それを大事にしていきたい。これはいつまで残るかはわからないが、そういうものが伝えられていく側面がある。人間の社会は変わっていくものであり、永遠に一つのことが伝わるとは思わないが、ある地所が無くなったからといって、全部が急に無くなるとも思えない。そのつなぎのところで、何をどう考えていくかが今の問題なのではないか。例えば日本人は稲作の民族であった。土地を耕して営々と生活を営んできた。人間は基本的に土地を大事に思って動かないし、それを子孫に伝えることが大事だと思ってきたのだろう。現在ではそんなことはなくなってきている。それでもこれが、まだ日本

人の基本的な考えであり、精神構造がそれによって支えられている側面もあるのだ。あるいは、日本の武士も全くななくなっているが、何かでその心を伝えようとするところがある。物理的に規制される部分と、作り上げられた文化が伝わっていく部分とが、区別できるようでできない。東南アジアを考えると、そういう段階的なことを考える必要があり、あまり直線的に考えすぎてもいけない。

高谷 物理的に森があるから、森らしい人間になる。森が無くなっても、しばらくの間は残っている。それはその通りだ。だが私は物理的にも森を残しておきたいのである。ところが今は世界システムが森を消滅させている。これについて人々は、住民達も望んでいるのだからいいだろうと言うけれど、それは違うのではないかと言いたいのである。住民も望んでいると言うけれど、先にも言ったように、本当のところは誰にもわからないのである。そここのところに配慮するのが地域研究である。

世界システム論者が言うような方向で物事が進んでいくと、地球は破壊される。だから無理をしてでも世界システム論者を除外して、ローカル・エリートと住民だけで一度考えてもらおう。その間、外の人には口出しをしないでおこう。東南アジアの構想力の元にあるのは、そういうことなのだ。

坪内 森を残してというときの、森という意味を議論する必要がある。実際に森を残したいのなら、森の中に住んでいる人の話をしなければ

ならない。ところが高谷さんの話はローカルエリートと結びつける。この我々よりも快適な状況、あるいは高層ビルの中に住んでいる東南アジアの都会の人が、森の人と同じような発想のできる基盤があるのかどうかは謎だ。

物理的な森自身はシンボルとして残すべきなのか、それではどんどん減らして、どれぐらい森が残っていたらこの考えは残るのか。解決できない問題ではあるが、精神構造の問題と、物理的な生態の問題をどこでマッチさせていくのかを考えることは重要だろう。今後の問題に残るのではないかと思う。

古川 ジャカルタの町を歩くと、ケトクマジックという自動車の修理のガレージが非常に多い。普通のガレージ屋だと機械がいっぱい出ているが、ケトクマジックという看板を掲げているところは、車が入ってきたら厚い毛布を掛けて、中を見せない。ケトクマジックでは、毛布を掛けるだけで直るのだという話がある。別に普通の修理屋でもいいようなものだが、ケトクマジックという看板を掲げることでよく流行る。何かそういうものが残っているのかなという感じがある。

関本 森といっても、残すのは森一般ではないのだろうか。どこにポイントがあるのか。熱帯雨林を伐採した後にも森ができるかもしれないが、一次林とは別のもだから切つてはいけなとお考えなのだろうか。

高谷 あまり具体的には考えていないが、こと熱帯多雨林多島海地域に限るなら、スハル

トではダメだが、マハティールになら委せようという考え方なのだ。スハルトはジャワという火山の人であり、そこのエコロジーを考える力はある。だが、森や海はまた違う。

ところで、具体的イメージとして、私が将来にどんな熱帯多雨林多島海を想像しているかという、それは海岸部ではメガロポリスだ。まだ人口が大幅に増えるだろう。そしてもっと多くの港ができていくだろう。それがメガロポリスを作ると思う。

だが、本当のところを言って、こういうイメージを出すのは、熱帯多雨林多島海の人で、しかも住民の心のわかる人が出さないといけないと思う。そのときに日本人やジャワの人が口を挟むべきではない。それが本当にわかり合える範囲とはどの範囲か、その範囲を決めようではないかというのが私の「世界単位」だ。その範囲の人達の間で答えを出させる。一次林でなければいけないのか、どうかということもその人達に決めてもらう。

**友杉孝** 生態論理とか、生態論的な考え方は色々な人間の生活の諸側面に有効性を持つ。今日の話は、国民国家をその一つの事例として取り上げ、国民国家の生態的基盤あるいは両者のずれが具体的に話されるものと理解していた。その国民国家をタイの事例を頭に浮かべながら考えていた。ヨーロッパ近代、フランス革命を通じて国家という枠組みの中に、民族という歴史的に想像された共同体を入れて、国民国家が作られた。しかし、ヨーロッ

パにおいても、国民国家の枠の中で地域的・民族的な相違を残し、それが現在でも地域紛争として時折り顕在化している。東南アジアの国々も近代化の過程において、このような国民国家の形態を取らざるをえなかったが、それぞれの国が利用できる独自文化を利用して、多様な国民国家が形成された。

タイは独立国であったから、戦後でなく、1920年代のナショナリズム運動からタイの独自性を考えることもできるだろう。一般にタイの国民国家やナショナリズムを語る場合、民族、言語、仏教というような要素に分解して論議される。これら諸要素と生態との論理連関を具体的に考えてみなければならない。一般化して国民国家を生態論的にこうだと言えるものではないだろう。

歴史的に形成された生業は、生態論理に結びつくものであろうが、国民国家の国境は、必ずしも生態論的な地域区分と重ならない。バンコクを中心とする現在のタイ国家の中に、東北タイという非常に広い地域の異質の世界を含む。東北タイはメコン川によって区切られているが、むしろラオスとの往来が激しい。生態論的に言えば、ラオスと一緒になった方がもっともらしく見えるかもしれない。タイの国民国家形成における生態論理が持つ歴史の意味を、こういう視点から考えることもできるであろう。

ただ、今日の話で混乱を招いていることの一つは、「生態」が超歴史的に語られている

場合と、具体的な歴史的条件下で語られる場合があることだ。生態論で何が説明でき、何が説明できないかということも議論されているが、人間の生活が一定の自然条件下にある以上、何らかの関係があることは自明だ。説明できるできないは、具体的に歴史的な条件下で媒介項を見つけ、具体的な経済現象、政治現象とうまくつなげられるかということに関わるだろう。何らかの媒介項が必要だと思う。媒介項を見つけるのではなく、高谷さんが高谷さんらしい直感によって見つけたものを人に話される場合、哲学的あるいは形而上学的と言われる論証を受け付けられないような語りになるかもしれない。例えば、坪内さんの語られる小人口世界とそこでの生業形態を媒介項とすれば、もう少し話が具体的になり、それだけ説得性を増すと思われる。

**高谷** 哲学でいかなければいけないと思っている。

**友杉** 哲学的なことは非常に貴重に思う。直観が前提にあり、それがなければ何も始まらない。しかし、直観を対象化し、他者を説得する論証を提示してほしいということだ。

**田村** 坪内さんの立てた二つの問題は、とらえ方として両方ともあると考えた方が良いのではないか。むしろ生態が単純に人の行動様式を決めているのではなく、具体的には人がその間に介在している。生態をとらえる側の個々人という認識の問題がある。私自身としてはそちらの方を考えたい。むしろ人を動か

すのが、単純に生態であるとか、国家であるとかではなくて、「想像の生態」というものがあるのかもしれない。生態というもので一つはつめていく必要があると思うのと同時に、もう一方では、人が持つ認識の問題の部分を考えていきたいと思う。

坪井さんからインドシナの社会主義の点で議論が出ていた。言われていたとおり、もう少し議論をつめる必要があると感じた。それと同時に、イギリスとフランスとの対比の話があったが、私が言うのはビルマに対して影響を与えたイギリスという国民国家の特色であって、その特色を述べるのにフランスと対比したにすぎない。

**黒田景子** 私は、タイとマレーの国境あたりで、ネットワーク社会の移り変わりを見ている。国民国家ができるということは、国境をどう管理するかという問題につながり、私自身は特にそこに興味の重点をおいている。あの地域は比較的順当に決まった国境のように見えるが、大陸部のものと島嶼部のものが混じり合い、曖昧になっている地域だと認識している。そこにタイとマレーシアの国境が引かれることによって、曖昧なものが存在を許されなくなってきている世界に思える。例えば、タイ側からマレーシアに季節労働者が自由に行き来していたのが、必ず人数計算をしてビザを与えるという形の国境管理システムができてしまう。そこに住んでいる人は、自分が何者であるかを常に明確にしなければならない。無い

ものには名前を与える形でそれが進んでいく。

それで、元々曖昧なものに名を与えていくという西欧からもたらされたシステムから見えていくと、その中での人自身も自分が選びとっていくうちに変わっていく。生態の中で、これが生態であるという形で選ばれたものや、選ばざるをえないものが強く残っていき、消えてしまうものが他方にある。それが全部合わさったときに、国民国家の終焉後の東南アジアが持ちえる形は何かということに非常に興味がある。そのときに、どういう方向に力が働くのか。果たして今の生態が、どの程度の力を持っているのだろうか。それは単なる地方的な特色として終わってしまうようなものなのかもしれない。

海田能宏 つい事務局的な発想になってしまいが、今日の研究集会は、生態と国家という面から、来年の秋に予定している国際シンポジウムの予行演習の意味もあった。東南アジア世界を考えると、外から借りてきた「想像の共同体」理念よりも、エコロジカルな発想を優先した方がわかりやすいが、これをあまり準備なく国民国家論とつなげて議論するのは少々無理があるという印象を持った。

「生態」ということについて、東南アジアの生態から我々が学ぶことは、彼らがアダプティブ・テクノロジーを持っていることだと思う。森に住む人たちの汎神論的な自然観に基づいた森の利用があるし、すっかり変貌したかのように見える農業も、やはり根幹

には、その風土に合わせたアダプティブ・テクノロジーを持っている。それに引き替え、近代による生態支配は、画一的なイデオロギーとそれに伴う画一的な技術でもって、ブルドーザーのように東南アジアに押し入り、大きく生態を変えていった。

たまに「緑の革命」のような大きなブレイクスルーがあり、外来技術が入ってくる。しかし、それも10年もすれば既に在地化し、アダプティブ・サイクルに入っていく。エボリューションとアダプティブ・サイクルを繰り返してきたのが今の東南アジアだと思う。

最近の高谷さんは非常に先鋭化して、東南アジアといっても熱帯多雨林と海しか考えない。「生態」を熱帯雨林の暗い森の中に住む、僅かな人達が持っている自然観に限定してしまうと、かなり片寄った議論になってしまうのではなかろうか。

坪内 予定時間も過ぎてしまい、結論らしい結論も出せないが、それにも関わらず、生態を考えることが重要なのだと基本的には信じて疑わない。おそらく高谷さんの議論はイデオロギー化しているのと思うが、東南アジアの熱帯多雨林の中で、小人口世界で育ったイデオロギーを伝えなければいけない。あるいはそれ自身を大事にして、そこから構想できることが何かを考えていくことは、今後、必要ではないかと考えている。東南アジアの原型を理解すると共に、それが世界に訴えるものは何かを考えていきたいと思う。